

# 文 國 大 女 子

第百三十八号

平成十七年十二月発行

賢治の山男像……………工藤哲夫(一)  
——典拠の可能性——

中古における云わゆる陳述副詞について……………井上博嗣(三三)  
——「かならず」の場合——

浮舟入水の後……………加納重文(四七)  
——源氏物語終末の思想——

京都女子大学図書館所蔵連歌関係資料 翻刻と解題 I

長谷川千尋 (六七)  
中前正志

叡山文庫蔵『降魔大師縁起』翻刻と解題……………畑中智子(二〇二)

彙報……………(二三)

# 彙報

## 狂言を見て

### 平成十七年度後期国文学会行事

短国一回生 塩見 知明

○学会旅行 那智・勝浦方面

九月十二日（月曜日）～十三日（火曜日）

引率教員三名（工藤、坂本、山崎）以下、学生三十九名が参加し、道成寺、補陀洛山寺、熊野那智大社などをめぐりました。後に掲げました学生の感想文にもありますように、大変有意義な二日間でした。

○秋期公開講座（大学と共催）

十月二十七日（木曜日）三講時

講題 キリシタン版イソップ寓話集と日本語

講師 京都教育大学名誉教授 大塚 光信 氏

（なお、前期行事である新生歓迎狂言鑑賞会（六月十八日実施）の感想文も併せ掲げました。）

私は、今まで狂言を見たことはありませんでした。それどころか、全く興味がなく、見たいと思っただことさえありませんでした。そのため、どのようなもののかもほとんどわかっていませんでした。

狂言というと、小学生の頃に教科書に載っていた『附子』が狂言であるということ、今回見た後に思い出しました。この話は、おもしろくて好きだったので、見る前には忘れていたので、苦手意識がありました。

狂言というと、昔からある芸能の一種で能と同じようなものだと思います。能もよくは知らないのですが、難しく、きちんと専門的な知識を持っていないとわからないものという印象がありました。狂言も似たようなものだと思っていたので、一回見たくらいで、その楽しさがわかるようなものではないと思い、狂言を見ることに対して全く乗り気ではありませんでした。

しかし、実際に当日になり見てみると、初めの説明から私の思っていた狂言観は覆されました。大げさなほどの声や動きで、

簡単に何をしているのか、どういうことを表しているのかがわかり、とても楽しめました。

『清水』では、太郎冠者が鬼になり、主人をおどかさ所や、それがばれてしまう場面がおもしろかったです。『濯ぎ川』では、最後に姑が帰っていく所の歩き方や、洗濯をしている時の音や動きがおもしろかったと思いました。どちらも本当に楽しくて、声を出して笑っていました。

私の持っていた狂言の印象は、全然違って、とても楽しいものだと思います。これから先、狂言を見る機会があれば、ぜひ見たいと思いました。

## 狂言鑑賞会に参加して

短国一回生 森 下 はるか

入学以前から楽しみにしていた「古典芸能鑑賞会」でしたが、今年度は狂言師の茂山宗彦先生、茂山逸平先生ら、人気の高い方々が来てくださると聞いて歓喜した方も多いと思います。

高校時代、学校行事の一環として、学校近くの能楽堂で能と狂言を鑑賞する機会がありました。そのしんと静まりかえった心

地良い空気に、よく通る能役者の声が合わさって私はいつしか眠りの世界に入っていました。そんな私を起こしたのは、狂言に笑わかされている周囲の人々の声でした。

今回拝見させていただいた「清水」と「濯ぎ川」も、声を出して笑わずにはいられないストーリーでした。「清水」は、何とも言えない幼稚な嘘に騙される主人と太郎冠者のやりとりに、今に通じる人間臭さを感じました。現代の舞台で演じれば、きっとおもしろみに欠けるようなこの作品も、狂言で演じることで、よって、より簡潔におもしろみを増しているのだと思います。

「濯ぎ川」は、気弱な夫が口やかましい妻と姑にこき使われ、一度は立場が逆転するものの、結局はその反抗も虚しく終わるというものでしたが、ただの笑いだけではなく、話の中に、何か遠回しに考えさせられる人間関係の有様を感じました。

初めて狂言を観てから三年、そういった身近な出来事を笑いと共に風刺するところが狂言の魅力であり、無形文化財としての役割であると思うようになったのは、この二つの作品を拝見させていただいてからです。

また、私の勝手な見解ではあったのですが、こういった伝統芸能を重んじ継承しておられる方というのは、その使命感のようなものなどでかなりお固い雰囲気を持っておられ、敷居が高い方な

のだろうと思ひ込んでいました。しかし解説をしてくださった茂山千三郎先生をはじめ、最後に私達の質問にもお答えくださった茂山宗彦先生は、我々にもとても親しみやすい気さくな方々で、私の余計なイメーজは見事に崩れました。

若者の伝統芸能への関心が薄れていく中、一つの伝統芸能に対して、今回のような親しみやすい方々と出逢い、そこから興味を深めていくことは決して悪いことではないと思います。ちよつと周りを見渡せば、津軽三味線で有名な吉田兄弟、雅楽器奏者で不動の人気を誇る東儀秀樹さんなど、今活躍している若手の伝統芸能継承者は大勢います。彼らと共に日本の伝統芸能をこれから先も守り続けていけるのは、これからの日本をつくっていく私達なのではないのでしょうか。

### 新入生歓迎行事狂言鑑賞会を見て

大國二回生 小山 恵 美

能が内へと凝縮する動きをもつのに対し、狂言は外へと広がる動きをもち、「泣く」や「笑う」といった人の基本的な動作でも、大きく異なる動きで表現される。狂言の動きが外へ向けられたも

のであるのは、数百年前には屋外で行っており、声を出すとともに、その動きで遠くにいる人にも関心を寄せてもらおうとしたからだ。また、ことばと少しの動きで場所の移動を表したり、舞台上に何か「在る」ように見せたりする。これらのことを知って、非常に興味深いと思った。

『清水』は中学生の時に教科書に載っていたので一度読んではいたが、舞台を見るとずいぶん違ったものに思えた。太郎冠者の扮する鬼が「いで食らおう」と言って主人を襲う場面では、同じ言動を繰り返す鬼に対し、主人の反応が変わっていく過程がおもしろかった。また、主人の命令に対する、太郎冠者の返事ひとつひとつから、落胆などのその時の気持ちが伝わってくるように思えた。

『濯ぎ川』では、あらすじを知らなかっただけに、嫁が川へ流されても、男が助けようとしなかったことに驚いた。が、結局はもとの関係に戻ってしまい、男がかわいそうだった。最後の姑の退場のしかたがとても印象に残っている。

今回の話もちろんのこと、たくさん話が口伝えで今まで数百年伝えられてきて、また、これから後の時代に伝わっていくことがすごいと思った。

素直な目で見る、ということとは難しいことだと思うが、これか

らもそれを忘れずに、解説してくださった時の話の中の園児のように、狂言の舞台を見る時には楽しんで見たいと思う。

演じる相手との関係でも舞台が変わる、ということも聞いたので、その違いもいつか楽しみながら見られるようになりたい。

自然と笑いの起こる、楽しい一時間半でした。

## 狂言鑑賞会で感じたこと

大國一回生 西田優子

「狂言」という文字が初めて文献に登場するのは室町時代のことで、その前には猿楽と呼ばれており、寺や神社の前、町の中で通りがかった庶民を相手に演じられていたそうである。今回の舞台を見て、本来の狂言の姿とはこういうものではないかと思っ

た。私達は古典芸能というと、それだけで敷居が高く思いがちである。しかし舞台が始まってみると、登場人物の台詞も物語の筋もわかりやすく、自然と笑いが出た。そして、時間の経ち方も、現代の娯楽であるTV番組を見ているのと同じように過ぎていった。時間は楽しいほど、リラックスしているほど早く過ぎていく

ものだ。終わった後、今現代の娯楽を観た後と同じように、「面白かった」「楽しかった」という言葉がするりと出た。元来狂言は庶民の娯楽であった。私が本来の狂言の雰囲気があると思った理由はこれが一つである。

二つ目の理由は演者の方と観客の距離がとても近かったことである。これは役者さんの人柄によるところも大きいだろう。古の昔、演じられていた場所が寺や神社の前ならば、演者も庶民にとつて親しみやすい存在であったに違いない。

これは茂山家の「お豆腐主義」が生み出すものである。そのお豆腐主義について紹介したので、『茂山宗彦 茂山逸平と狂言へ行こう』という著書から、以下抜粋。

京都には「おかずにつまれば豆腐にせい」という言葉があります。それにひっかけて、「余興に困れば茂山の狂言にしとけ」と言われるようになりました。これは十世千五郎正重が、みなさんが喜んでくださるならと、どこへでも気軽に出版かけていって狂言をしたことがはじまりです。豆腐は高級な食材ではないという揶揄ですが、それを逆手にとつて、「豆腐は鯛といっしょに煮られて高級料亭にも出されるが、冷奴や湯豆腐として長屋のおかずにもなる」と正重は言いました。誰からも愛されるよい豆腐になればよい……。以来、こ

れがわが家のモットー、「豆腐のような狂言師」になったので  
す。

質問タイムのときも、宗彦さんがその場に合わせた受け答えを  
して下さった。私は、狂言の中で主人が命令をした時、それが太  
郎冠者にとって嫌なものだと、とぼけたような声で返事をするの  
が面白かったのだが、どのような発音をしておられるのかわから  
なかった。「狂言の中での返事は、何と言っておられるのです  
か」という質問をしたところ、その返事の声は、昔から伝わるも  
のではなく、自分で新しく作られたものさうだ。また、心情に  
よって返事にもバリエーションがあり、きちんと使い分けがなさ  
れているのだ。

宗彦さんも逸平さんも共に初舞台は四歳のとき。「気づいてみ  
たら狂言しか出来ないように育てられました。」というのは宗  
彦さんの言葉だが、茂山家の大黒柱である現・千五郎さんは十三  
世。幕末の頃の茂山千五郎正席（まさとら）（後の初世千作）を九  
世としての数え方で、この人は井伊直弼に認められて彦根藩のお  
抱え狂言師になり、明治維新後は京都狂言界の第一人者となっ  
た。やはり、伝統の重みは並大抵ではないだろう。

だがその場に合わせて形を変えるお豆腐のように、これからも  
芸を磨かれて、今の茂山家だからこそ出せる味というものを作っ

ていかれると思う。

そう、その場に合ったといえは「狂言をされていてのやりがい  
は」という質問に「今日、みんなに出会えたこと」という答えに  
会場は拍手につつまれて幕となった。

## 国文学会旅行、いざ、まゐりなむ。

短国二回生 梅地 亜実

去る九月十二・十三日、国文学科の学会旅行が催された。九月  
とはいえ、まだまだ日差しも厳しく、なんでこんなに晴れるんだ  
と（まあ、旅行としては晴れた方がいいのだが）太陽を恨めしく  
思いつつ、学会旅行はスタートした。今回の旅行は、和歌山県の  
名所を巡るというもので、私は旅行申し込みの時点から、非常に  
楽しみにしていた。我々一行は、貸し切りバスで和歌山県へと向  
かった。

まず初めに、歌舞伎や能、さらに文楽の演目として名高い、悲  
恋物語「娘道成寺」の舞台となった道成寺に行った。「娘道成寺」  
は、熊野詣に訪れた、若く男前の修行僧・安珍が、紀州の清姫と  
いう若い女性に惚れられて、結婚の約束をするが、思い直し、逃

げ、道成寺の鐘の中に隠れてしまう。清姫は安珍を追いかけて、ついには蛇となり日高川を渡り、道成寺の安珍が隠れた鐘に巻きついて、安珍を焼き殺してしまう、という話だ。私たちは、道成寺に所蔵されている重要文化財「道成寺縁起」の絵巻の写本を使った、絵解き説法を拝聴した。毎日何回も絵解き説法を行っているらしく、慣れたもので、内容は悲恋物語なのだが、とても面白く説明していただいた。絵巻で、清姫が段々と蛇に変化してゆく絵は恐ろしく、女の執念の凄まじさを感じさせられた。

次に、補陀洛山寺に向かった。補陀洛山とは観世音菩薩が住む所とされていて、那智の浜はそれに通じていると信じられていた。そこで平安時代のこの寺の僧が釘付けされた船に乗り、補陀洛渡海に出発したという。詳しい説明を聞き、この船のレプリカを見せていただいたのだが、小さいのである。この中に座って、しかも密閉されて渡海に出たんかい!?と驚いてしまった。

一日目の日程はこれで終了し、私たちはホテルに向かった。ホテルは、船でないと行けないということで、一旦バスを降り、船に乗ってホテルへ向かった。ここには、温泉が六つ（！）もあり、特に洞窟の中にある温泉は最高だった。料理もおいしく（新鮮な海の幸！）、夜には先生方と懇親会なるものも行った。

さて、二日目。今回の旅のメインでもある、熊野那智大社に向

かう。この日も雲ひとつない快晴で、非常に暑かった。熊野那智大社へ行くため、私たちは大門坂から登り始めた。

辺りは樹齢八百年を越す老杉等がよきよき生えていて、太陽を遮っていた為、涼しかった。朝なので空気も清々しく、気持ちよかった。この苔生した石段の道を、昔の法皇や上皇達も通ったのだと思うと、歴史の重みを感じた。さらに四百七十三段の石段を登り、やっと標高五百メートルに位置する熊野那智大社に着。本殿にお参りして、しばし休憩。風は涼しく、熊野の山々も青々として、登った！という達成感でいっぱいだった。

次に、那智大社を下り、世界遺産と刻まれた石碑を横切り、那智の滝に向かう。那智の滝は非常に大きかった。滝の上から吹き降ろしてきた風で、滝の水しぶきが微かに飛んできた。皆黙って長い間、滝を眺めていた。那智の滝の上には、烏天狗が住むというので、探してみたが、残念ながら私には見つけられなかった。

以上で、旅行の日程は全て終了した。旅行前に予想していたより、楽しく、有意義な時間を過ごせた。先生方、先輩方と色々な話ができただけのも、旅行に来たからこそだったと思う。この旅行記を読んで、興味がわいた方は、ぜひ来年は参加してみたい。最後になりましたが、この旅行の企画者である、工藤先生、坂本先生、山崎先生、ありがとうございました。

## 学会旅行に参加して

大國三回生 石川裕佳

今年の学会旅行は一泊二日で和歌山県へ行った。

一日目。大学を出発し、バスに揺られること約三時間、まず一つ目の目的地・道成寺に到着した。道成寺は和歌山県最古の寺で御本尊は国宝の千手観世音菩薩である。御本尊を始め、二十数体の仏様がいる宝仏殿で道成寺についての話を聞き、見学をした後、道成寺に残る安珍と清姫の物語「道成寺縁起」の写本を使った絵とき説法を体験した。絵とき説法はお寺の方によってとても良いテンポで進んでいき、私たちと他に一緒に聞いていたツアーのお客様に話をふったりしながら面白おかしく、しかし話の軸はずれることなく話されていて、約四十分の話はあっという間に終わったように感じられた。私は今回初めて絵とき説法を体験し、絵巻き物はこのような使い方をするんだということを知ることができた。絵巻き物を使うことで安珍清姫伝説を楽しく理解することができたので、多くの人にも体験してもらいたいと思った。

次に補陀洛渡海で有名な補陀洛山寺へ。境内にある補陀洛渡海

船のレプリカの前で、僧が観音浄土を目指し那智の浜から出発したこと、この時に船の中に食料数日分とともに僧を閉じ込めたことを聞いた。その後その僧がどうなったのかは分からないそう  
で、これが分かったら大発見なんだと知ることができた。

見学を終えるとホテルに向かった。お世話になる南紀勝浦温泉ホテル浦島はまず船に乗り換えて行くホテルである。食事は産地特有のものや新鮮な海鮮物などがあるバイキングであり、温泉は六つもあった。学校の旅行なのにこんなに豪華だとは思っておらず、驚いた。夜には先生方、先輩、後輩と話す機会もあり、普段聞くことのできない話なども聞くことができ、楽しく過ごすことができた。

二日目は大門坂から世界遺産に指定された熊野古道を通り熊野那智大社を目指した。段差も定まらず、苔も生えている石段を昔の人は当時の服装で登っていたと思うと、動きやすい格好で登っていてもしんどくて大変なのに着物で登るのはすごいなと思った。何百段もの石段を登りきると到着した。とても疲れて汗もかいたが、大自然の風を全身で感じることで、とても気持ちよくなった。そしてお参りやジャンボおみくじをしたりして三重塔へ行き、最後に裏参道を通って那智御滝の滝壺へ行った。ずっと上の方から落ちてくる水の流れは刺さるかと思う程垂直に



落ちてきて、水しぶきが飛んでくる程近くで見ていると言葉数が減ってしまう程圧巻だった。帰りには本州最南端・串本にある橋杭岩を間近で見ることができた。

行きはシーサイドドライブを満喫していたのに帰りは寝てしまいう程疲れたが、楽しい思い出や経験ができて大満足な旅行となり、参加してよかったと思った。

# 女子大國文

第百三十八号

平成十七年十二月十五日 印刷  
平成十七年十二月三十日 発行

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町三番地  
編輯兼 京都女子大学国文学会  
発行者

電話 055-551-9076  
FAX 055-551-9120  
振替 02080151314

〒602-8004 京都市上京区上長者町通黒門東入  
印刷所 西村印刷株式会社

電話 055-441-4108(代)  
FAX 055-441-6282